妖蛸

田中貢太郎

明治二十二三年比のことであった。詩人啄木の碑(ひ)で知られている函館の立待岬(たてまちざき)から、某夜(あるよ)二人の男女が投身した。男は山下忠助と云う海産問屋の公子(わかだんな)で、女はもと函館の花柳界(かりゅうかい)で知られていた水野米(よね)と云う常磐津(ときわず)の師匠であった。

男の死体はその翌日になって発見せられたが、女の死体はあがらなかった。あがらないのは女は死なないで逃げたがためであった。そして、何くわぬ顔をしていた米は、五稜郭に近い某(ぼう)と云う網元の妾になった。その時網元の主人は、先妻を亡くしているうえに子供もないので、子供が生れたなら本妻になおすつもりを

していた。

そのうちに三年ばかり経って米が妊娠した。網元の主人は非常に喜んで、出産の日を待っていたが、米の妊娠は真箇（ほんと）の妊娠でなくて、病名も判らない奇病であった。

そして、米の腹は日に日に大きくなって往った。主人は入費を惜（おし）まないで、市（まち）の名医と云う名医にかけたが、いずれも手のつけようがないと云って匙（さじ）を投げた。

それがために米は死んでしまった。主人は泣く泣く米の死体を火葬場に送った。その火葬場へは、米の弟の新吉と云うのも来ていたが、それは真箇の弟でなし

に、米がまだ歌妓（げいしゃ）をしていた時からの情夫で、土地の人から達磨の新公と渾名（あだな）せられている浪爺（あそびにん）であった。やがて積みかさねた薪（まき）の上へ米の死骸が置かれた。それと見て人びとは念仏を唱えた。同時に隠坊（おんぼう）が薪に火を点けた。

　火は薪から薪に移って往った。気の弱い女たちは遠くの方へ往って、そこには男ばかりいた。隠坊は後から後からと薪を加えたが、米の死体はなかなか焼けなかった。そして、火力が強くなればなるだけ死体から水を吹出して、手足の方は焼けても胴体は依然としてそのままであった。

普通五六十本の薪があれば、完全に焼けることになっているが、もう予定の薪は焚(た)いてしまっても焼けないので、隠坊はがまんしきれなくなって、傍にあった漁師用の手鍵(てかぎ)を執って死体の腹へ打ちこんだ。と、大きな音がして腹が裂けるとともに、その中から大きな蛸(たこ)が出て来たが、それが猛烈な勢いで達磨の新公に飛びかかるなり、真黒い毒どくしい墨をぱっと吐いた。墨は新公の顔から胸のあたりを真黒にした。

新公は悶絶した。それと見て人びとは隠坊に加勢して、蛸を撲殺し、更めて薪を加えて蛸もいっしょに焼いたが、今度はすぐ焼けてしまった。

数日してのことであった。網元の主人が火鉢の傍でうつらうつらしていると、米の姿が見えて来て何か云ってしきりに謝った。主人ははっと思って眼を開けた。と、そこへ彼(か)の新公が悶死したと云う知らせが来た。

新公が悶死したことに就(つ)いていろいろの噂が伝わった。それによると、米が海産問屋の公子と立待岬から投身したのは、新公が為(し)くんだ演戯(しばい)であった。米は茨城県の水戸の生れで、水泳の心得があるところから、投身すると見せかけてそのまま沖の方へ泳いで往った。そこには新公の小舟が待っていた。米といっしょに投

身した海産問屋の公子も、多少水泳の心得があったのでこれも沈めないで体が浮いた。そして、浮いたひょうしに見ると、米が小舟を目がけて泳いでいるので、火のように憤（おこ）って追っかけて往った。すると新公と米は、舟板を執って男の顔と云わず頭と云わず、さんざんに撲りつけて沈めたと云うのであった。（伊藤晴雨氏談）

底本：「伝奇ノ匣6　田中貢太郎日本怪談事典」学研M文庫、学習研究社
　　　2003（平成15）年10月22日初版発行
底本の親本：「新怪談集　実話篇」改造社
　　　1938（昭和13）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
2010年10月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。